

74

特 252

658

中將 奥平俊藏述

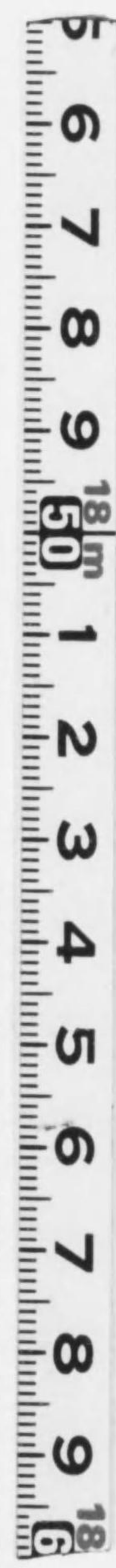
# 國體の根本血と魂

卷頭 奉天會戰—渾河の埋草

鈴木中佐責任自覺の忠死

84

日本協會發行



# 始



奥平閣下には本會講演會に於て是れ所感發表を御願ひして居りますから、會員諸氏は御熟知のことと思ひます。  
「國體の根本血と魂」は、去る二月十六日茨城縣北相馬郡六郷村の大日本運動本部講演會に於ける講演要旨を筆述せられたもので、全國民に日本國體の根本を認識せしむるために、血と魂との關係を明にして我が國體の根本こそ血と魂であることを顯現し且つ西洋自由主義學問の缺陷を指摘して紀元二千六百年の記念として日本學の樹立に邁進すべきことを強調せられたる憂國至誠の大文字であります。  
鈴木中佐責任自覺の忠死を傳へる巻頭の「奉天會戰—渾河の埋草」は、中佐の忠勇義烈眞に日本武人の雄鑑たるべく、現下各層に於て動もすれば責任逃避の聲を聞く時其の責任感の發露は時弊を衝くものとして幾多の示唆を與へて居ります。(編者)

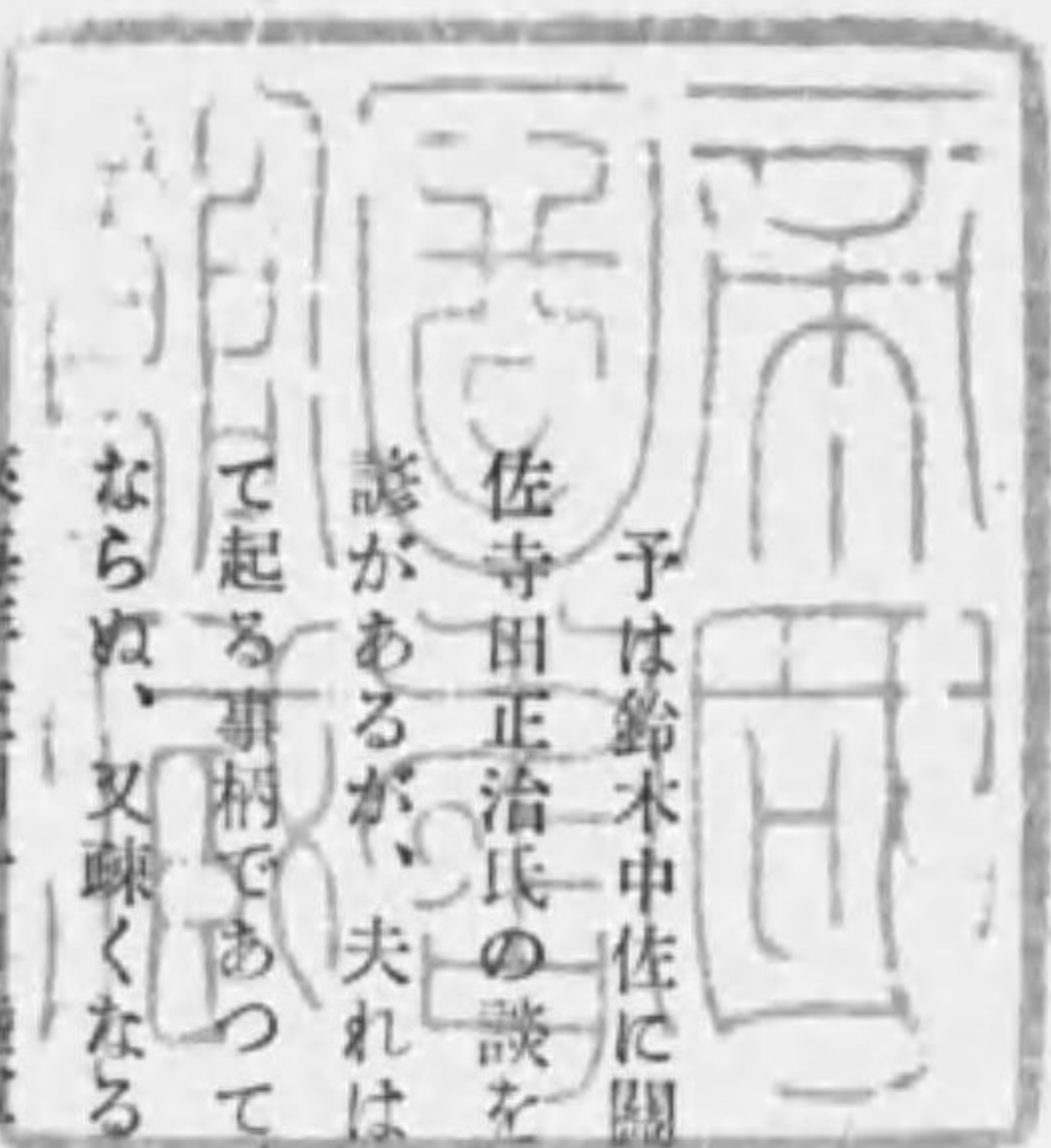
目次

奉天會戰—渾河の埋草	一
鈴木中佐責任自覺の忠死	一
國體の根本血と魂	一
一、緒言	一
二、日本民族の一元的血縁	二
三、血と民族結合の關係	三
四、地縁に依る人間の結合	四
五、血縁中樞の民族結合力	五
六、日本の血縁に伴ふ心縁	六
七、日本民族靈魂不滅の信仰	七
八、日本の血縁觀と其美果	八
九、西洋文明の血縁觀の缺陷疎漏	九
一〇、國體の基本組織と神勅	一〇
一一、西洋國家觀の缺陷と西洋主義の闘争性	一一
一二、西洋文明の自滅性	一二
一三、西洋自由主義學問の基礎的誤謬	一三
一四、日本學樹立の急務	一四
	一五
	一六

# 奉天會戰—渾河の埋草

鈴木中佐責任自覺の忠死

陸軍中將 奥平俊藏述



予は鈴木中佐に關する此の話には何等關係なき者であるが、此の話のワキ役である陸軍騎兵大尉佐寺田正治氏の談を聞き感激の餘り屢々此の話を宣傳する者である、去る者は日々に疎しといふ諺があるが、夫れは一般普通の關係に過ぎない者の間に起り、又は何等痛切の感激なき事に對して起る事柄であつて、親子の間柄の如きは如何に長く離れて暮したからとて決して疎くなつてはならぬ、又疎くなるべきものでない、予は此の話を聞いたのは既に十年以上昔の事であるが、爾來毎年三月十日陸軍記念日の頃になると思はずも念頭に起るのである、去つても去つても決して疎くならないのである

明治三十八年三月九日第四軍に屬する大久保支隊(司令官陸軍少將大久保利貞)は三縱隊となり



遼陽―奉天街道東側地區を経て敵を追撃し、夕刻前各縦隊を以て渾河左岸の王家灣子、楊官屯、三岔子の線に進出して茲に渾河を渡らねばならぬ段取になつた、此の日朝來南の烈風土塵を捲き天地晦冥一間先きすら時々全く見えない有様であつた、其の上冬期堅固に張り詰め軍隊の氷上通過可能なりし渾河の結氷も、風が南方より搬び來りし濕氣の爲め所々融解して氷上の通過は全く不可能となり、對岸には敵が堅固な陣地を築き防備を嚴にしてゐるので、到着匆匆時間には乏しく容易に徒渉場は發見せられず、百方手段を盡しつゝある間に日は暮れ暗黒となつた。

敵將クロバトキンは此日其の大總豫備隊を以て我が滿洲軍の最左翼たる第三軍に向ひ攻勢を執り、第三軍の左翼に於て某聯隊の如きは全く潰滅に歸し、大砲數門も亦敵手に落つる等、兵力の寡少より戦況は刻々悲境に向ひつゝあつた、第三軍の危急を救ひ戦況を好轉させる許りでなく、敵の極東軍の主力を潰滅せしめ、全勝を收めて以て國難を克服する爲め、第四軍は速かに渾河を渡り背後から敵を包圍せねばならぬ、第四軍をして此の當然の任務を遂行せしむる大使命は實に大久保支隊の雙肩に懸つてゐる、然るに同軍所屬の第十師團は遠く右方七間房附近に於いて渾河を渡らんとしてゐたが、大久保支隊にして速かに渡河し得なければ右方第十師團も左方第四軍の主力も共に進出困難となり、第四軍の任務も延いて滿洲軍全體の計畫も達成し能はざる狀況なの

であつた、斯の切迫せる狀況は大久保支隊司令官も十分に判断し承知してゐたのだが、如何せん渾河は楊官屯附近にて河流三線に派かれ、其の我に近き第一第二線は徒渉し得るも、敵陣地の直前に在る第三線は水深胸の上に及び渡河の目的を達し得るや否や頗る疑問であつた、若し萬一渡河失敗に歸した場合は其の影響甚大にして取返しのかぬ事態を惹起すのであるから、大久保司令官は軍司令部より頻々として渡河督促の電話命令に接するも、尙ほ慎重事に處するを要したのである。

午後十時頃又も軍司令部より渡河督促の電話がかゝり田原軍參謀と高洲支隊參謀と互に興奮し切つた口調で電話交渉を續けてゐる、田原軍參謀曰く

若し渾河が深く渡るに困難であるならば鈴木聯隊を以て渾河を埋め立て、之に依つて爾餘の諸隊を渡せといふのが、野津軍司令官の意圖である

とて、電話は切られた、第四軍司令官野津道貫大將は、剛勇無雙世に隠れなき名將であるから、鈴木聯隊を渾河の埋め草にする命令は全く野津將軍の意中より出たのであると推察出来る、斯かる命令は軍人ならぬ人には一見無理に聞へるであらう、戦争眞理に通曉せる軍人にして初めて斯かる命令の眞諦を理解し得るのである、因に高洲參謀は予の士官學校同期生にして田原參謀は

予の知己であるがズツト先輩であり、鈴木聯隊長は後備歩兵第十八聯隊長陸軍歩兵中佐鈴木則柯<sup>のりか</sup>氏にして予の未知の人である。

電話が切られてから、高洲參謀と市川支隊參謀長とは悲愴の面持でひそ／＼何か話し合つてゐたが、頓て市川參謀長は傍にゐた支隊司令部附騎兵小隊長寺田中尉を顧み、「目下の状況は斯く斯くである、只今電話で傳へられた軍司令官の意圖を直に鈴木中佐に傳達されよ」と命じた、支隊司令部の在る水家屯から鈴木聯隊本部の在る楊官屯までの距離約二千米で、寺田中尉は間もなく楊官屯に着いた、楊官屯の北端に老爺廟といふ小さな祠がある、其の傍に腰をかけ高粱の幹を折り之を焚いて暖を取りほの暗い燈火で地圖を凝視してゐたのが鈴木中佐であつた、寺田中尉は下馬して中佐の前に進み寄つた、中佐は極めて平靜にして屈託なき態度で中尉を迎へた。中尉は全軍特に第三軍の状況を地圖に就いて述べた上、野津軍司令官の意圖を電話の語通りに傳達した、中尉は當の聯隊長たる鈴木中佐に向ひ其の聯隊は渾河の埋草となつて全滅し、之に依つて他隊を渡すのだといふ比類少き重大命令を傳達するので、自分自身すら平靜を保ち難き心持であつたら、死の宣告を受くる中佐は如何にと徐ろに之を窺つた、中尉の眼と中佐の眼とは偶然にもパツタリと合つたが、中佐は溫容毫も平生と異らず、莞爾として「宜しい承知しました軍司令官に御

安心を願ふと御傳へ下さい」と答へた、中尉は如何に沈勇なる鈴木中佐でも此の命令には多少ギツクリとした衝動を受けるであらうと思つたのに、餘りの落着方に聊かアツケなさを感じざるを得なかつた。

やがて中佐は側らの副官を顧み、徐ろに「もう何時頃かい各隊の準備はよからうかな」と言ひつゝ自ら草鞋の紐を締め直した、中佐は既に全聯隊の全滅を覺悟して對岸の敵陣地を夜襲すべく部下各隊に命令してゐたのである、全般の状況上自ら自己の頭上に下る任務と、己の責任とを自覺し誰の命令も受けざるに先ち自ら決死を覺悟して大事の實行に着手してゐたのであるから、渾河の埋草全隊全滅の軍司令官の命令に動ぜざるは當然であると、寺田中尉に初めて判つた、近頃天皇政治最高補弼の責任者にして失政の責任に對し唯辭職すれば責任解除になるとして恬然たる者、比々皆然りである、就中生命の惜しさに國家の大事に當り其の重大職責を放擲して二日間も隠匿しありたる者の如きは、鈴木中佐の事蹟を聞き當に慚死すべきである。

此の夜十二時頃水家屯の支隊司令部にて聞けば楊官屯方向に方り、小銃機銃の激しい音が闇を破つてけたゞましく鳴り響いた、是れ云ふ迄もなく鈴木聯隊の夜襲である、之を耳にして司令部員一同は悲愴の感に打たれ、何人も語るものなく無言の裡に「鈴木聯隊はトウ／＼やつたな、成

功すればよいが失敗に終りはすまいか」と、心中に其の成功を祈り氣遣はぬ者とはなかつた、十日午前四時乃至五時の間に第一線から傳令が飛んで来て

鈴木聯隊は只今前岸敵陣地を占領す聯隊長戦死其の他死傷無數と報告した、支隊司令部の一同は茲に漸く愁眉を開くと共に、鈴木中佐の戦死を惜しまぬ者は無かつた。

三月十日午前九時頃支隊司令部は進んで楊官屯の渡場に来た、見渡す限りの廣々とした積には鈴木中佐始め將卒無數の死體が一面に横はり、河原の砂礫は是等忠死者の鮮血に紅く彩られ見るも無惨の光景であつた、支隊司令官大久保少將は鈴木中佐戦死の所に到り、馬より下りて合掌し「鈴木中佐よくやつて呉れました」と唯一言涙滂沱として雙頬に流れ、一行亦惨として聲を呑み敢て仰ぎ見るものとははない、少將は片腕と頼む鈴木中佐の戦死を惜み其の忠勇を讃嘆するの餘り、低回去る能はざるものゝ如く佇立稍之を久うした、斯くては戦機を逸するの虞れがあるので市川參謀長は少將を促して魚鱗堡東方高地へと急行した。

鈴木聯隊の渾河渡河戦を仔細に研究すれば幾多の教訓を得るであらう、就中鈴木中佐が滿洲軍全般の戦況より其の資務を重んじ、野津軍司令官の一見した丈けでは無理かとも思はれる命令に

接するに先ち、己を殺して前岸の敵陣地攻撃に決心せることは偉人能く偉人の心を知るの憐であつて、斯る卓越せる指揮官を有する我軍は將來共百戦百勝疑ひなき所である、軍司令官の意圖は鈴木聯隊を以て渾河を埋立てよとの事であるが、指揮官善く部下の人格を知り全幅の信頼を懸け得るに非ざれば斯かる重大命令は容易に下すを得ないであらう、然も斯の命令に先ち自ら屍となつて渾河を埋立て、其の部下を以て敵陣地を奪取し、之に依つて全軍大勝の基を作りし事は未來永久に我が戦史に輝き、後世の龜鑑として我が全軍を奮起せしむるものである、中佐が斯く徹底的に任務を遂行し得たのは平素多年の修養に依る蘊蓄を發揮せられしものであつて決して偶然でない、吾等は斯の如き人を稱して軍神と呼ばねばならぬ。

中佐の忠勇に依つて第四軍全般の行動は大に進捗し、殊に左に隣接せし第六師團が意外に速く敵の背後に進出した爲め、敵は狼狽して第三軍に對する攻勢を中止し全軍北方に退却するに至つた、當時の第六師團參謀にして予の同期生たる安藝中將の談に依れば、此の日朝來鐵道線路に沿ふて北方に退却する敵數實に幾萬なるを知らざる蜿蜒長蛇の如き大縱隊を發見し、其の壯絶なる偉觀を一時恍惚として眺めてゐたが、此の敵を殲滅すべく北進したといふ、更に第六師團の急進に依り退路を遮斷された敵兵團は我が部隊に猪突して第六師團司令部は十日午後二時毛官屯に於

て收殘兵集團より桶狭間式の急襲を受け一時非常の危険であつた等、奉天東方二臺子、魚鱗堡間の地區は名狀すべからざる紛戦亂闘を惹起し、彼我の接戦格闘肉弾相搏ち手榴彈飛び砲彈炸裂の爆聲突撃の喊聲相交り、十日夜の如きは死物狂の收兵は暗に乗じて各方面に突進し、前記大久保支隊司令部は魚鱗堡にて敵の急襲を受けて家屋防禦を爲し、砲兵は砲廠より霰彈射撃を爲すの亂闘を現出し、又戦利野砲中隊は前面の敵撤去せるに依り安全地帯と心得奉天東方に露營中、敵の收殘兵から寢込を襲はれ、護衛の工兵小隊と共に木葉微塵に蹂躪され、逃路を急ぐ敵兵は狡猾にも足手纏ひの砲車などには目も呉れず、逃ぐるに便利な馬のみを奪取し、之に乗り雲を霞と暗中に消え失せたといふ、就中紛戦は十日正午頃より十一日拂曉に於て白熱期に達し毛官屯を中心とする一帯の平原は闇中に入る處で彼我兩軍巴と入り亂れ、亂射亂撃の小闘が夜の明くる迄間斷なく繰返され、四面に閃く點々たる射撃の火光は遠く天に沖する部落の火災や焚火と相映じ、各所に響く銃聲、爆音、飛彈の唸り、劍戟の響き、日露兩語の勵聲、罵聲、呻吟の聲、軍馬の嘶等相混じ、凄愴なる修羅場が展開され、其の真相は到底筆舌の盡し得ざる状態にして、明けて十一日の旭光戰場を照せば、一帯の野や岡に點々倒れある彼我の死傷者あり、劍を按じ銃を握りたる兩軍の小部隊は連日の苦戦に疲れ茫然相對するあり、或は自然的休戦に彼我兵員の各所に談笑する

あり、數百の敵の軍馬各所に群集するあり、顛倒せる砲車に倚りて眠れる敵の砲兵あり、退却し得ざる數千輛の輜重車馬の停滯せるあれば、畑中に無數の行李散亂せるあり、白旗を翻へす敵の集團あれば、猶ほ我に向つて射撃する敵部隊ある等戦場の光景は慘愴極まりないのであつた。

此朝我が近衛師團は直に鐵嶺方面に追撃を續行し他の各團隊は整頓に着手した此の整頓に先ち處理すべきは殘留散在せる敵の收殘兵投降兵であつた、投降兵一萬有餘の俘虜を收容したのは當時の第六師團長大久保春野中將(後大將)にして、此の未曾有の戦果を永久に記念する爲め、受降ヶ岡と題せる記念碑が二臺子に建立されてゐる、鈴木中佐の責任感が身を殺して渾河右岸の敵陣地を急速に奪取し、所屬大久保支隊のみならず第四軍就中第六師團の急速なる前進が促進され、其の結果は敵をして我が第三軍に對する逆襲を斷念せしめ、又多くの敵軍に退却時機を失はしめ其の後方に取殘されたる多くの部隊と我が軍との間に紛戦亂闘が惹起され、遂に全く逃路を失へる多數の俘虜を收容した事は前記する通りである、奉天會戦の大勝は實に鈴木中佐の偉勳に因るもの多しといふも決して過言ではない、併し乍ら吾々は茲に責任感の發露は獨り戰爭に於て偉大なる功績を生むのみでなく、社會一切の事柄に對しても亦同様である事を忘れてはならぬ。

現代人は餘りに恰愴に過ぎ、智に於て多きに過ぎ、利害の打算に長じ、自己に利する所なけれ

ば動かず、却つて責任に冷淡である、之は大なる通弊だと云はねばならぬ、五・一五事件及び二・二六事件に於て高級軍人及び政治上層部に於ける責任感の發露の顯著なる何物をも見る事が出来なかつた、滿洲事件及び支那事變に於ける軍人の行動は國民を安心せしめてゐるが、現代政治上層部の責任感の狀況は國民に大なる疑懼心を驅り立てゝゐる、大臣たるものは辭職を以て唯一の逃避所としてはならぬ、大命を奉拜するに先ち、先づ一身を天皇陛下に捧げ奉るの覺悟が出来た後に之を拜受すべきである、時弊を痛感して敢て一文を草する。

## 國體の根本血と魂

陸軍中將 奥平俊藏 述

### 一、緒言

本年は紀元二千六百年の記念すべく祝すべき目出度き年である、之を祝し之を記念する所以は人に依りて多少異なる所もあるであらうが、私は教育勅語の冒頭に於て訓へさせ給ふ如く、皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚にましまして、時に逆臣なきに非ざるも、吾々民族の祖先が大體に於て克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟して二千六百年以上の永きに亘り、今後も益々國體を擁護し國體精神の訓ゆる處に従つて愈々我國家が盛運の一路を進むべき事が確かに豫想され、其の豫想の實現を期する爲め紀元二千六百年を祝し記念するのが極めて必要だと思ふ、之が爲め吾々は此の際國體の根本を究明し之に對し堅確なる信念を養ふの必要を痛感するのである。

## 二、日本民族の一元的血縁

日本民族は誰でも御互ひは遠い昔の最初から同じ血を分けた間柄であると信じてゐる、換言すれば皇室を宗家とし皆皇室に血縁を有し皇室の分家として漸次増殖して今日に至つたものだと信じてゐる、大國主命が天照大神の神勅に依り其の支配してゐた中國を献上し、出雲政權が高天原朝廷と合併した事實を吾々は神話に依つて記憶してゐるが、今日出雲地方や山陰地方の人々で自分等は征服された民族の子孫であるとか、又は天孫民族即ち本來の日本民族に非ざる民族の後裔だといふ感を持つてゐる者は皆無である、唯神話をよそ事の様子に知つてゐるに過ぎない、之は一體何を意味するか、之は日本民族が民族として出来上つた時には既に同一血縁の同族であると信じ切つてゐた事を示し、日本民族の一體性が極めて強く成立してゐた事を示すものである、人間はお互ひに異民族、異人種であるとの自覺ある場合には心の底から一體感を持つことは容易に出来ないのであつて、血縁といふものは強い結合力と反撥性を持つものである。

近頃の新しき學說に依ると日本民族は一種族でなく、亞細亞大陸より東南下したものと又は南洋方面より北上したものや古來の土着者等數民族の混合だといふが、其の通りだとしても長き年

月を費して残す所なき混血に依つて、知らず識らずの間に原の古い人種を忘れ、新しき民族として最初から同血の間柄だと信じ合つて一社會を作り上げて來たのである、日本民族は斯の如く遠く久しい以前の昔から全く一民族となり、今日七千萬の内地人は悉く同一民族として一血縁に結び付けられてゐる、之は日本民族が唯ソウ信じてゐる丈けでなく科學的に證明されてゐる、東京帝國大學教授古畑醫學博士の研究に依ると

日本人の血液型の分布は地方的に多少の差はあるが、總括的に其の血液型遺傳因子は殆んど一定して居り、混血は各地方平等に行はれ、日本人の脈管中には悉く一樣の血が流れてゐる事が明かにされた、之に反し支那は四千年の古き歴史を有するも、今猶ほ漢、滿、蒙、土耳其、西藏の五族に分れ一體一元の民族と成り切れず、爲めに強力なる統一國家を建設する能はず悶へてゐるのを思ふとき、吾々は太古に於て既に一元民族を作り上げたる指導者としての皇祖皇宗の偉大さと、能く其の指導に服従し之を翼賛したる民族祖先の優秀さに對し絶大の敬意を捧げ鴻恩を感謝せずには居られないのである。

## 三、血縁と民族結合の關係



人間は總て自己保存と種族保存の爲めに働いてゐる、種族保存の爲め子を生み之を育てる、親子は血縁の最も近いものである、此の一番血縁の近いものは相互に緊密なる結合と協力とに依つて、お互ひに愛し合ひ護り合ふて力を一に生きる力を大きくする、個體が別であつても、共通の目的に向つて力を合せ歩調を揃へて統一ある一體と成る事を體系化といふ、人間は血縁の近い者程體系化が容易である、即ち多數人間の集團協力の生物的基礎は血縁である、人間は縦に増して行くと共に横にも擴がる、縦の始めは親子で横の始めは兄弟姉妹である、此の縦横の同一血縁の者は多數同時に存在する、其中で比較的血縁の近い者はお互ひに血縁を意識し協力結合するが血縁の薄くなるに伴れ血縁意識は減少衰滅し體系化力を失ふから、同一血縁あるとも無限大に結合するのは不可能であり、又個人的意識での血縁的結合は自ら必要の限度がある、ソコで昔を尋ねれば同族であつても血縁の薄き者は赤の他人となり、個人的血縁といふ理由では結合しなくなる、故に此の血縁的結合は比較的小規模にして事と次第に依つては人間は是丈の結合では生活されない。

#### 四、地縁に依る人間の結合

ソコで地域を接してゐる者同志結合する法則を發明し村や町の人達は必要の方面に關して體系化する、之を地縁の結合といふ、所で範圍が廣くなり例へば九州全體四國全體等といふことになると、一町や一村と異なり地縁に依つて常に體系化するを得ない、場合に依つては寧ろ利害相反し争ふ事も出来る、故に日本といふ地域を一つとしたからとて夫れ丈の理由では七千萬人が協力結合する事は困難である、此の場合又血縁意識が働き始める、夫れは兄弟であり親戚であるといふ個人的血縁意識でなく社會的血縁意識である、之が單一であり強力である程社會の生命力は強大である、故に民族が完全に一體としての存在になつてゐないと社會が一團と成る力に乏しいのである、日本民族が同一血縁として出来上つてゐるのが如何に立派な社會的構造であるか了解出来るだらう。

#### 五、血縁中樞の民族結合力

日本民族が同一血縁である事が世界列國に勝れてゐるのみならず、其の内容に於ても亦獨特の構造を備へてゐる、何千萬といふ大人口になるとお互ひに血縁があつても、其の結合が不十分となるは前述の通りだから、其の強き結合を求むる爲めには血縁中樞の存在が不可缺の要件だ、日

本の民族社會を見ると横の血縁一體性を有すると共に、縦に全民族の血縁を中心とする偉大なる血縁中樞が存在する、是れ即ち萬世一系の天皇である、日本民族が一體と成つて行く生活即ち社會生活から見た血縁、言換へると社會を本位として見た血縁に於て、皇室を結合の中心としてゐる事は何等疑ふの餘地は無い、既述の如く日本民族の最初は數民族の混合だとしても、餘す所なき完全なる混血に依つて今日は一名と雖も皇室に血縁を持たぬ者は無い、従つて皇室は日本民族の血縁中樞として榮へ、皇位は嚴として全民族の最高中心と成つて、萬世一系天壤無窮に輝いて來てゐる。

外國の王位が唯權力の中心を意味する丈けであるのに、我が日本の皇位は全民族の社會的血統の中心に在りと高く明かに示してゐる、故に日本民族は横に結合の基礎を持つ丈けでなく何所に居る人も天皇陛下を唯一の最高目標として、天皇陛下に結び付いて行きさへすれば、理想的の社會的團結が出来るのである、日本の國家は即ち天皇を血縁中樞とする血縁團體である、民族が其の血縁中樞に繋がりにて團結するは人間自然の性情だから、日本に似たる國家が他にも出来る筈であるのに、然らざるは血縁中樞が神聖尊貴偉大ならず民族も亦優秀ならざりし結果、民族發展の經過中に於て血縁中樞が滅却された結果であらう。

## 六、日本の血縁に伴ふ心縁

日本民族の血縁構造は右の如く世界に卓越してゐるに依り、血縁に伴ふ心縁も亦世界無比である、先づ縦の心縁を見ると、上天皇の大御心からも下臣民の赤心からも相互に上下一體不可分の心縁を構成してゐる、即ち第一には上からは親たるの御自覺を以て全臣民に對し陽光の如き慈愛の御心を垂れさせ給ひ、下からは子たるの自覺を以て限りなき敬慕の赤心を捧げ奉り、第二には上からは師たるの御自覺を以て全民族に對し常に生きるの道を教へさせ給ひ、下からは弟子たるの自覺を以て大御心を奉じ之に恪遵し奉らんとする赤誠を致し、第三に上からは主たるの御自覺を以て全民族に全民族として一致團結する様導かせ給ひ、下からは臣たるの自覺を堅持し常に大命に絶對服従し奉るの赤心を獻げ、斯くして上下一體全民族團結の心縁を作り上げてゐる、此の心縁を社會全體の立場から忠義と謂ふのである、吾々は父母に孝に兄弟に友に夫婦相和を法則としてゐるが、之は要するに自己中心の事だ、若し社會、民族全體を考ふるときは、イザといふ場合萬事を抛つて全民族の中心たる天皇の御前に集まらねばならぬ、故に忠義は之を大義といひ孝よりは絶對に重きものとしてゐる。

血縁が同じであれば横の関係即ち國民相互若干の愛着を感じるも唯夫れ丈けである、各國民は此の意味の心縁を持つが、日本の心縁は之と趣を異にし、其の特色は一人残らず天皇陛下の大御心に結び付き、大御心を民族の心の輝きとし魂の權威としてゐるから、自然大御心を通して全民族の心が結び付くのである、夫れ故に事ある毎に大御心奉戴の聲が起るのであつて、日本の心縁は縦の心縁を通して横の心縁を強化する構造になつてゐる、即ち日本國民は個々天皇陛下の大御心に結び付き、之に依つて全國民の團結が完全に出来るのである。

### 七、日本民族靈魂不滅の信仰

吾兒此の寶鏡を視まさんこと、猶ほ吾を視るが如くすべし、共に床を同くし、殿を共にし、以て齋鏡となすべし。

之は天照大神の皇孫に賜へる寶鏡の神勅である、神勅の御趣旨は斯の鏡には吾の魂が憑いて居て、汝と汝の國家修理固成の事業を擁護指導するぞ、汝は斯の鏡の傍に近く起居し、常に斯の鏡を拜して吾を思ひ、神聖の身となり國家修理固成の事業に精勵せよと仰せられたものであると拜察し奉る、寶鏡に天照大神の御魂が憑いてゐ給ふといふは、明治四年九月十四日明治天皇の皇靈

### 遷座の詔勅に

神器は天祖威靈の憑る所、歴世聖皇の奉じて以て天職を治め玉ふ所の者なりと宣はせ給へる所を吾々は信仰するものである、寶鏡の神勅に先ち天つ神よりイザナギ、イザナミの二神に天の沼矛を賜ひ、又イザナギ、イザナミの二神より天照大神に御頸珠を賜つたのであるが、其の思召は寶鏡の神勅と同じく共に靈魂不滅の御思想と拜察し奉る、寶鏡に天照大神の御魂が憑いてゐ給へば、代々の天皇が寶鏡に向はせ給ふとき現はれ出づる御姿は天皇の御姿にして又大神の御姿であらねばならぬ、實に尊嚴崇高の極致にして天皇は即ち天照大神の延長御再現にして神に在らせ給ふ。

### 八、日本の血魂觀と其美果

祖先の靈魂は永久に此世に現存して子孫を擁護する、子孫は祖先の血と魂の分化延長即ち祖先の再現であるとは日本民族の傳統的信仰信念である、斯の信仰信念より子孫が此の世に生れ此の世に生活する事及び其の幸福は皆祖先の賜なりとし、報本反始の思想は古來日本民族に旺盛であつた、祖先は子孫より見て皆神だ、茲に敬神崇祖となり敬神崇祖より神社と祭祀が出来た、過去

の親即ち祖先に對し至誠を捧げ儀禮を以て奉仕するは祭祀であり、現在の祖先即ち親に對し至誠より出づる事實を以て奉仕するは孝である、依つて祭祀と孝とは其の精神に於て一つである、日本民族最古の親即ち第一の祖先は皇祖にして、現在の天皇は皇祖の直系延長にして皇祖の再現に在らせられ、臣民は皆皇子の延長再現といふべきであるから、天皇は臣民の親にして臣民は天皇の子に該當する、茲に忠孝は我が國に於て一本と成り、従つて臣民相互は同胞にして、家と國とは一に歸する。

日本の家は人間の最も善く綜合統一融和する小團體である、我が國にて家の原理と國の原理は相同じく、我が國の家理はやがて世界の平和各民族共存の原理となるべき性質のものにして其の運命を有する、神武天皇八紘一宇の詔勅は斯の原理の表現にして偉大なる根據を有す、之を漫然視するは大なる誤りである、我が國の家が斯く立派なるは血と魂との關係にして、家族中血と魂の關係上優位を占むる家長が家の中心であるからであると信する、而して我が國體の根本が血と魂であることは既述の通りだ。

### 九、西洋文明の血魂觀の缺陷疎漏

然るに西洋自由主義文明は斯の重大なる血と魂の問題、即ち人間の最も基本的なる親子關係を卑近なる感情と同一視し、之を概括的に感覺性の偶然範圍に入れ、人間の精神と本能とを不自然に分離する二元主義の弊に陥つてゐる、血と魂の問題即ち親子關係は感覺的なる偶然物に非ずして所謂自由平等なる個人的社會關係以前に嚴存する運命的先驗的關係、即ち人間の最も基本的なる生命關係である。

従つて何故親は子から孝行さるべきやといふ問題は西洋の個人的理性に依り解釋し難き深奥の問題にして、此の生命的原理は西洋自由主義文明の想像し難き所であらう、我が國の孝は子が親の養育の恩に報ゆる道德的意識のみの産物ではない、單に養育に對する報恩のものなりとせば生後直に他人に養はれたる子の生みの親に對する孝は何を以て説明するか、孝には勿論報恩的道德意識を含むが、子の小生命は親の大生命の分化延長であるといふ生命的なる本能情操の働きを看過すべからず、孝を報恩的道德とのみ見るときは不具に生れ生活の難苦より親を怨み、又は赤貧の家に生れ或は能力に乏しき親を持ち、之が爲め親より何等見るべき恩に預からずとて、世の幸福なる子を見るにつけ親を怨み、不孝を爲す子の不心得を説得し得ぬ事となるのである、此の孝の生命的關係は我が國に於て又天皇と臣民とを繋いでゐる、我が國體の根本は實に血であり魂

である、夫れは單なる道德的報恩關係のみでなく、更に深奥なる人間の生命關係である。

### 一〇、國體の基本組織と神勅

我が皇祖皇室の英邁偉大なる神格は以上述べたる日本民族の血縁心縁及び魂の問題を捉へ、人間の自然に従ひ何等の無理を加へず、適切周到に之を組織化し體系化し、日本民族の祖先の優秀なる善く斯の御指導を遵奉し、斯くして長き年月に亘り之を理想的に完成し我が國體を成したのである、而して我が國體の基本組織は天照大神時代に確固不拔程度に完成しありて、將來の歸趨も十分に洞察し得る状態に在りしものと推察さる、依つて大神は之を明察達觀し給ひ、假令大地を打つ槌は外づる、共吾達見は絶對に外づれずとの御確信に満ち充ちて、萬世一系天壤無窮の神勅を渙發あらせられたものと拜察さる、神武天皇の詔勅亦然りといふべきである。

### 一一、西洋國家觀の缺陷と西洋主義の闘争性

西洋自由主義文明の國家觀は斯の貴重なる血と魂の問題を缺く、彼の國家觀は國家は天賦の自由を有する個人が社會契約を結んで創設したものだとしてゐる、即ち國家は畢竟個人の利益の爲

め存在するものにして、個人が主で國家は従だと見てゐる、是れ政治上の自由主義にして各人の能力を十分に發揮し其の運命を自發的に開拓せしむる一面の長所なきに非ざるも、各個人を内面的精神的に結び付くること我が國體に於けるが如き統合原理を缺く、従つて極端なる生存競争が行はれ、富者は益々富み貧者は愈々貧にして富の偏在を來し、又個人の利益を主とする爲め排他主義に陥り、猛烈なる争鬭性を伴ひ、自由主義却つて大衆の不自由を招來する、斯の缺陷を補はんが爲め平等主義が生れた、平等主義に依り國家は自由主義競争の結果より來る不平等を矯正し多數者の幸福を保持する爲め、ある程度個人生活を強制する、然るに人間は本來平等ならず又此の平等主義も實は權利の平等に過ぎずして眞の平等は期し難く、結局社會主義の主張となり具體的に經濟及び財産の平等を主張する、社會主義は階級闘争に依り資本家と戦ひ又合法的に理想の實現に努むるも、必ずしも資本家の存在を否定するものでなく、結局不徹底を免れない、茲に過激派は共產主義を主張して資本家の絶滅を圖る、共產主義は即ち自由主義個人主義の窮極に達せるものにして其の母體は自由主義個人主義である、故に吾人は共產主義を排斥すると共に自由主義個人主義を排斥せねばならぬ、殊に之等西洋主義は即ち闘争主義にして融和一體主義なる我が國體精神に反する。

## 一二、西洋文明の自滅性

先きに露國の共產革命及び世界大戰の勃發を豫言して世人を驚かしたる評論家メレチコフスキ氏は現代世界の偉大なる人物の一人として擧ぐるに足る人であるが、世界文明を三期に分ち論じてゐる、即ち古代ギリシヤ羅馬の文明を第一文明、現代の自由主義西洋文明を第二文明、第二文明に代りて將來起らんとする文明を第三文明と稱し、第二文明が世界の進歩に一大貢獻をしたことは何人も否定するを得ないが、斯の文明は始めより既に自己の内面に自滅の運命を胚胎してゐた、即ち其の闘争性と征服慾とである、斯の闘争性と征服慾は飽く事を知らない、第一次世界大戰の悲惨を骨髓に徹して痛感したとはいへ再び之を繰返さずには置かない、爲めに歐米各民族は再起し得ざる運命に墮落するの外はない、斯くして第二文明は自滅する、之に代つて世界を支配するものは第三文明である、夫れは歐米よりは起らぬ、人類永遠の平和を希望して止まざる民族の間より起る、具體的にいへば東洋の一角より起り世界に其のなごやかな光を投げ掛くるであらう、之は尊嚴崇高比類なき我が國體を研究しての結論であることは勿論にして、吾人は先に西洋主義を闘争主義であると言ふたが、メ氏も亦之を明確に認めて西洋自由主義文明の自滅に迄及

んでゐる。

## 一三、西洋自由主義學問の基礎的誤謬

西洋自由主義文明は個人に於てのみ窮極の價値を認め、夫れ以上に深き意義ある神、靈魂、民族、國家等の精神的價値を否定せんとし、人間は之等超個人的のものと無關係の如くに錯覺してゐる、而して其の考へてゐる人間は自己中心の個人である、其の個人は皆自由平等であつて、夫れが全世界を通じて正しいと考へてゐる、此の誤れる精神的態度が西洋自由主義學問として表現されたのである、然るに自由主義文明は今や行詰り、世界の狀態は一大轉換期に直面し、自由主義學問に對し再檢討が要求されてゐる、自由主義文明で人間を抽象的一般的の個人と考へてゐるのは大なる誤りだらう、人間は歴史と傳統の地盤の上に斷えず發展して來た各民族の一人としての個人即ち民族人である、自由主義文明の考へてゐる國家は個人の利益を達する唯物機構に過ぎないが、國家は斯る唯物的皮相的のものでなく其の本質は更に深き根柢を持つ、國家は長き歴史と傳統の産物にして吾等の祖先が創造せる文化及び民族精神の現れである、過去の現はれとしての現在であり未來を有する、故に國家の内に生活する個人は當然傳統的精神の制約を受けねばなら

ぬ、國家を離れて個人の存在は許さるべきでない。

#### 一四、日本學樹立の急務

此の嚴然たる事實を無視して、反民族反國家的なる西洋自由主義學問を説くは眞理の冒瀆である、時代轉換の趨勢に伴ひ人間の理念が個人から民族へと變り國家至上主義へと變つて來たが、初めから民族人國家人と考へるのが正しかつた、此の正しき理念から之に適應すべき學問の體系が樹立されねばならぬ、從來の自由主義學問に代つて日本學が理論化されねばならぬ、日本學とは日本民族國家の生命の生成發展に關する現象を原理的に掴み之を實行に移す理論體系を謂ふ、其の基礎は世界無比の崇高尊嚴なる我が國體にして日本學は當然世界に比類なき完全無缺のものたるべき事が豫定される。

紀元二千六百年の記念及び祝賀の爲め我が國民は茲に特に國體明徴に努力し従前に比して顯著なる一段階を劃し、學者は日本學の樹立に邁進し國民は之に協力して此の際其の緒に就くことが喫緊事であると信するのである。

附言 本稿中前半部血縁に關する事項は國體研究の權威者甲見岸雄氏の所説に依る所多し、記して以て同氏に對し深甚の謝意を表す。

昭和十五年四月二日印刷  
昭和十五年四月五日發行

### 國體の根本血と魂

【非賣品】

版權

所有

編輯發行  
兼印刷人 渡邊卓哉

印刷所 東京市芝區田村町六ノ一三  
日本協會印刷部

東京市赤坂區青山南町二ノ六三

發行所

日本協會出版部

電話 青山 (36) 一六九一五番  
一六六二七番  
振替東京一〇七、九三〇番

終



寫眞・設計圖人  
營業案内  
贈呈

(ハタキがハ人記名誌本  
イサ下込申御テニ話電)

日曜・祭日・夜間も  
御來社歡迎



日本一の月拂法と  
契約高を持つ「電建」へ

— 所業營地各 —

五五二	影節電	前停電	屋石上國	阪區	灘市	戸神	店	本
七七八	谷四電	前停電	日丁三宿	新區	谷四市	京東	所業營	京東
一六八	者長電	日丁二可	衣羽區	中市	濱橫	店支	濱橫	濱橫
五二九	岡靜電	日丁二町	警兩市	岡靜	店支	岡靜	岡靜	岡靜
九八一	中電	日丁一町	砲鐵區	中市	屋古名	店支	屋古名	屋古名
〇四三	八下電	偶西ル下	原松通	丸島市	郡京	店支	郡京	郡京
二七二	戎電	丁番五地	新波難區	南市	阪大	店支	阪大	阪大
三五	倉小電	前停電	町坂大	市倉小	店支	倉小	倉小	倉小
八〇五	東電	二二町	東上市	岡福	店支	岡福	岡福	岡福

敷地の御選定と賣買地  
の御相談は奉仕的にお  
世話をして頂きます

門專築建宅住  
會株式 建電本日